

# 熊本県の小学校におけるリード合奏に関する研究①

— 熊本県小学校器楽合奏コンクール（1981～1990）のレパートリー分析を中心に —

瀧川 淳・山崎 浩隆

## A study of elementary school accordion ensembles in Kumamoto (1):

An analysis of repertoires of the Kumamoto elementary school  
ensemble competition from 1981-1990

Jun Takikawa / Hirotaka Yamasaki

(Received September 30, 2018)

### 1. 問題の所在と研究の目的

熊本県・市の小学校で授業として、あるいはクラブ活動として展開される器楽合奏は全国に類をみない編成で演奏される。つまりリード楽器（アコーディオンや鍵盤ハーモニカに代表される空気を通してリードを鳴らすことで発音する鍵盤楽器）と2種類の電子楽器（シンセサイザーや電子オルガン、バスマスターなど）に加えて、打楽器（鍵盤打楽器を含む）のみの編成である。

全国的には、1950年代半ばに文部省の要請により左手のベース部のないアコーディオンが製造され、それが学校へ普及し、器楽合奏に取り入れられるようになったが、1960年代にはすでにリード楽器（ハーモニカを含む）のみの編成に弦楽器や管楽器を加える合奏形態を見られるようになり、編成上にも様々な創意工夫があった。さらに言えば、1970年代には、リード合奏は演奏する団体が激減している。

一方、熊本の小学校では、リード合奏は先に述べた編成で長年演奏され続け、県内コンクールや合奏研究会などの講習も盛んに開催されて今に至る。つまり器楽合奏に関して言えば、熊本県・市の小学校の音楽教育は独自の文化を育み、またその中で独自の教師文化を育ててきたのではないだろうか。しかしながら、熊本におけるリード合奏についての研究はほとんど進められず、また資料そのものも整理されていない状態である。

そこで本研究は、熊本のリード合奏の発展を多角的な視点から考察することを目的とする。本稿では、1981年から1990年にかけて熊本県小学校器楽合奏コンクール（熊本県音楽教育研究会・RKK熊本放送主催）

のA部門で演奏された楽曲（レパートリー）の傾向分析を行うことで、リード合奏における教育的なねらいを考察することを目的とする。

### 2. 研究の方法

本稿では、小学校における器楽教育並びに熊本県における器楽合奏の展開の概要を述べた後、1981年から1990年の10年間に熊本県小学校器楽合奏コンクールA部門で演奏された楽曲（レパートリー）を多角的に分析することで演奏楽曲の傾向や、80年代に器楽合奏で目指された音楽教育のねらいを明らかにする。また本稿の最後に資料として1981年から1990年に演奏された演奏曲目と演奏校のリストを掲載する。

なお、執筆は瀧川が1, 2, 3, 5を担当、山崎が4を担当した。

### 3. 小学校における器楽教育の展開について

本章では、戦後における器楽教育の流れを概観する。戦前より一部の推進者によって進められた器楽教育は、1947年の第一次学習指導要領（試案）において「音楽の知識や技術を習得して音楽美の理解・感得を十分に」するために正式に位置づけられた。翌1948年には『合奏の本』が文部省の編纂によって発行されたが、本書には低学年はリズム楽器を中心に、中学年ではそれに加えアコーディオンなどの旋律楽器が追加され、高学年では簡易クラリネットやバイオリンも加えられた編成が掲載されている。『合奏の本』は、その後教科書会社から出版される教材の規範的な役割を果たしたと嶋田は指摘し（嶋田, 2010, p.18）、このよう

な努力から1960年代には全校合奏も盛んになってきたと述べる(前掲書, p.20)。そして時を同じくして、海外で普及していた簡易楽器としてのリード楽器が日本に紹介され、1961年には全音楽譜出版社やトンボ楽器、東海楽器からいわゆる鍵盤付きのハーモニカが発売された。現在ではほとんどの児童が低学年で経験するこの楽器は、最初はボタン式であったが、その後も改良を重ね、鍵盤となり、さらに1968年の学習指導要領改定で「基礎」領域が定められたことから「ふしづくり」などへの活用で多くの導入が図られたと嶋田は推察している(前掲書, p.23)。ただ教科書への導入は中学校器楽用教科書が先で、その後の1970年代に入ってから小学校用教科書の高学年に採用されるようになり、さらに1970年代後半になってようやく低学年の教科書にも掲載されるようになった。

実践・研究面では、戦前より器楽教育に熱心な音楽教育者らによって音楽教育研究団体が設立され、器楽教育の研究が進められたことは檜下(2014)が指摘するところであるが、その中でも戦後初期の器楽教育、器楽合奏にとりわけ重要な役割を果たしたのは日本器楽教育連盟(1956年設立)であろう。日本器楽教育連盟は、地方農山村部への器楽の普及を掲げ、機関紙『器楽合奏』を発行し、器楽合奏コンクールを通して全国的な器楽教育指導レベル向上の役割を果たした(檜下, 2015, p.41)。本連盟は、1957年度に第1回「全日本器楽合奏コンクール」を開催するが、第3回から小学校の部は2部制となり、第1部は学習指導要領に示された教育用楽器のみの編成と指定される(しかしながら第6回大会から2部制は廃止)。また第6回からは参加団体の増加に伴って、地区大会が10区に分けられて行われるようになった。ちなみに1968年度第7回コンクールには、全国から380校が出場し、九州地区代表として玉名市立玉名町小学校が選ばれている。なお、出場する学校の合奏形態は様々だが、そのほとんどがリード合奏による出場であった。檜下は、このコンクールが、1960年以降、全国的に器楽教育・器楽合奏の普及と指導レベルの向上に役割を果たしたことを明らかにしている(檜下, 2015, p.41)。

#### 4. 熊本県における器楽合奏の展開について

現在、熊本県の小学校における器楽合奏はリード合奏そして吹奏楽と金管バンドの管楽器の合奏(以下、管楽合奏)の二つを中心に進められている。リード合奏は音楽科の授業でも行われるが、部活動で行っている学校もある。合唱と合奏の二つ部活動を同一の学校で行っている学校はあるが、同一の学校の中でリード

合奏と管楽合奏の両方を行っている学校はない。なお、合唱と合奏の二つを同一の学校で行う場合も、同じ子どもたちが両方の演奏をするのではなく、合唱部に所属する子どもと器楽部に所属する子どもに分かれている。

リード合奏と管楽合奏の関わりを見ると、1970年代にリード合奏の中に管楽器を加えた編成で演奏する学校もあったが、リード楽器と管楽器との音量の違いにより、リード楽器の音が聞こえにくくなるという理由からリード合奏と管楽合奏とに分かれることになった。

器楽の部活動においてリード合奏をするのか吹奏楽をするのかは、担当する教員の考えによるところが大きい。どちらをするにしても楽器がなければ子どもたちが演奏することができない。そのため、楽器の有無が大きく関わる。リード楽器は文部科学省から示されている「小学校教材整備指針」に整備の目安として「1学級あたり1程度」とあるように、教育課程の中で必要な教材として学校予算で購入されている。そのため、リード合奏は管楽合奏に比べると比較的容易に始めることができる。不足した楽器の購入や楽器の修理・維持に関しても学校予算から支出している学校が多い。管楽合奏の場合は異動した際、前担当者が楽器を整備していれば始めるのも容易ではあるが、そうでなければ楽器を揃えるところからスタートしなくてはならない。保護者や地域の団体に購入を依頼したり担当教員自身の人脈をもとに楽器を貸してくれる人を探したりという方法で楽器を集めることもある。中には、中古の楽器を知人や楽器店等から自費で購入し、楽器を揃える教員もいる。

運営面については、リード合奏でも管楽合奏でも発表の場を設定する教員は多く、その一つとしてコンクールを活用することがある。その他、校内での音楽会、学習発表会で発表する場を設定することもある。また、コンクールとは別に順位をつけることなく発表ができるようにするために合奏を指導している教員で組織した任意団体である「熊本県合奏教育研究会」が年度末に「合奏祭」という発表の場を設けている。この合奏教育研究会については別の機会に詳述することにする。

さて、リード合奏を行うにあたり楽器を揃えることについては管楽器に比べると比較的容易なのだが、難しいのは編成と楽譜の入手である。特に、器楽合奏コンクールや合奏祭では時間制限があるため、販売されている楽譜では対応できない場合がある。そのため、指導者が子どもたちの実態に応じて著作権の消滅したオーケストラや弦楽合奏の曲をリード合奏用に編曲することも少なくない。あるいは、そのようにして編曲

した楽譜を指導者が相互に貸借したり借りたものを指導する子どもたちの実態に合うようにさらに編曲することもある。

このように、これまでもそして現在もリード合奏は熊本県内小学校の音楽の部活動として盛んに行われている。ただし、今年度から教員の負担軽減のため、その指導を近隣で音楽活動を行ったことがある人に依頼する学校が出てきた。そのため、コンクールの出場資格に指導者が学校の教員であることが明記されている場合、出場できないという状況も現れてきた。発表の機会が少なくなることによって器楽活動が今後どのような方向に進んでいくのか、そして熊本県の器楽教育はどのような方向に進んでいくのか注視していきたい。

5. 熊本県小学校器楽合奏コンクール（1981～1990）で演奏された楽曲について

本章では、1981年から1990年における熊本県小学校器楽合奏コンクールA部門で演奏された曲目（301件）を多角的に分析することで、この10年間の傾向を明らかにすることを目指す。

本コンクールは、A、B、Cの3部門制を取っており、A部門は30名を上限として、使用される楽器はリード楽器（アコーディオン、鍵盤ハーモニカ等）と電子楽器2種類、打楽器に限定される。B部門は、50名を上限として、吹奏楽やリード楽器に管弦打楽器を加えた編成となっており、C部門は15名を上限に編成は自由となっている。なおC部門は、第30回（1986）から導入された。

1) 出場校の推移

本調査の対象となる年代の出場校の推移は、表1のようになっている。

表1 出場校の推移

回	A	B	C	合計
第25回	23	5		28
第26回	26	8		34
第27回	23	8		31
第28回	33	7		40
第29回	33	8		41
第30回	31	7	5	43
第31回	34	11	7	52
第32回	33	10	14	57
第33回	34	12	12	58
第34回	31	13	16	60

表1からはどの部門も緩やかな増加を辿るのではなく、ある年を境に増加する傾向を見ることができる。

部門別にみる出場校は、A部門が第28回（1984）に10校増となり、B部門が第31回（1987）に4校増となっている。またC部門は第32回（1988）に7校増となっている。そしてこれら部門別の増加に伴って、他部門の減少は見受けられないことから出場校そのものが増加していることがわかる。ちなみにA部門は第28回以降、出場校数はそれほど大きく変化していないが、B部門は、C部門の設置と共に増加している。このことからこれまで何らかの理由で出場が叶わなかった学校の出場が可能になったこと、また編成の多様化が生じたと推察できる。

ちなみに、2017年に開催された第61回コンクールの出場校内訳は、A部門10校、B部門21校、C部門18校（出場校総数49校）となっており、80年代に比べて、特にリード合奏の編成（A部門）が3分の1に減少していることをみると、80年代にはリード合奏がいかに盛んに展開されていたかがわかる。

2) 演奏頻度について 一楽曲順一

次にこの10年間に演奏された楽曲の演奏頻度は、次の通りである（表2）。ここでは3回以上演奏されたものを挙げている。

表2 演奏頻度（楽曲）

楽曲名	作曲家	件数
歌劇「マルタ」序曲	フロトー	23
歌劇「ストラデラ」序曲	フロトー	23
歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	17
歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	15
歌劇「アウリスのイフィゲニア」序曲	グルック	13
歌劇「アルジェのイタリヤ女」序曲	ロッシーニ	10
歌劇「バグダッドの太守」序曲	ボワエルデュー	9
歌劇「セミラミデ」序曲	ロッシーニ	8
歌劇「絹のきざし」序曲	ロッシーニ	8
小フーガ短調	バッハ	6
歌劇「ナブッコ」序曲	ベルディ	6
歌劇「タンクレディ」序曲	ロッシーニ	6
「四季」より春第一楽章	ヴィヴァルディ	5
歌劇「イーゴリ公」よりダッタン人の踊り	ボロディン	5
バレエ「まりも」より前奏曲・山刀の踊り	石井敏	4
組曲「アルルの女」よりファランドール	ビゼー	4
歌劇「盗むかささぎ」序曲	ロッシーニ	4
トッカータとフーガ短調	バッハ	3
中国の僧院の庭にて	ケテルビー	3
「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」第一楽章	モーツァルト	3
交響曲「新世界」第4楽章	ドヴォルザーク	3
喜歌劇「軽騎兵」序曲	スッペ	3
歌劇「フィガロの結婚」序曲	モーツァルト	3
歌劇「ジョコンダ」より時の踊り	ボンキエリ	3
歌劇「ジプシー男爵」序曲	シュトラウス	3
歌劇「ザンバ」序曲	エロール	3
歌劇「オベロン」序曲	ウェーバー	3

歌劇「マルタ」序曲ならびに歌劇「ストラデラ」序曲が最も多く23回、次いで多いのが歌劇「セビリア

の理髪師」序曲（15回）や、歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲（13回）である。なお、この中で10年連続演奏され続けているのは、歌劇「マルタ」のみである。上述した他3曲は、10年間のうち9年にわたって演奏されている。いずれの曲も80年代にコンクール曲として人気を博した曲であることは間違いない。

### 3) 演奏頻度について —作曲家順—

次に、作曲家順の演奏頻度について見てみたい（表3）。

表3 演奏頻度（作曲家）

作曲家	件数
ロッシーニ	57
フロトー	46
バッハ	16
ニコライ	15
グルック	13
モーツァルト	11
ビゼー	11
ボワエルデュー	9
ヴィヴァルディ	9
チャイコフスキー	7
ケテルビー	7
ボロディン	6
スッペ	6
ウェーバー	6
ベルディ	5
ドヴォルザーク	5
石井敏	5

これは10年間に5回以上演奏された楽曲を作曲した作曲家である。ロッシーニ（G. Rossini, 1792-1868, 伊）とフロトー（F. v. Flotow, 1812-1883, 独）の演奏頻度が圧倒的に多く、かなり回数を減らしてバッハ（J. S. Bach, 1685-1750, 独）、ニコライ（C. O. E. Nicolai, 1810-1849, 独）、グルック（C. W. Gluck, 1714-1787, 仏）らがその次に並ぶ。

国別に分類すると、ドイツ出身の作曲家が4名、イタリア、フランスが3名、オーストリア、ロシアが2名、その他、イギリス、チェコ、日本が各1名ずつとなっており、いわゆる西洋音楽の中心的な地域はバランスよくカバーされている。一方で、時代区分をみると、19世紀にかけて活躍した作曲家の作品が圧倒的に多いことがわかる（表4）。19世紀は、音楽史上、ベートーヴェンに始まったロマン主義の時代である。つまり80年代の器楽合奏コンクールでは、出場校の演奏

する楽曲のほとんどがロマン主義の音楽であったことがわかる。ちなみに、最頻出のフロトーとロッシーニ（ブロック体・太字）が活躍した時期はほぼ同じで、ロマン主義の時代の中でも、初期の終わりから後期にかけてである。

表4 作曲家の生没年と出身地

作曲家名	生	没	国
ヴィヴァルディ	1678	1741	イタリア
バッハ	1685	1750	ドイツ
グルック	1714	1787	フランス
モーツァルト	1756	1791	オーストリア
ボワエルデュー	1775	1834	フランス
ウェーバー	1786	1826	ドイツ
<b>ロッシーニ</b>	1792	1868	イタリア
ニコライ	1810	1849	ドイツ
<b>フロトー</b>	1812	1883	ドイツ
ヴェルディ	1813	1901	イタリア
スッペ	1819	1895	オーストリア
ボロディン	1833	1887	ロシア
ビゼー	1838	1875	フランス
チャイコフスキー	1840	1893	ロシア
ドヴォルザーク	1841	1904	チェコ
ケテルビー	1875	1959	イギリス
石井敏	1921	2009	日本

### 4) 演奏頻度について —ジャンル順—

この10年間に演奏された楽曲について、楽曲別、作曲家別にみてきた。ここで、括りを大きくして、ジャンル（様式）別に見てみたい（表5）。

表5 演奏頻度（ジャンル別）

ジャンル	件数
歌劇	184
組曲	43
協奏曲	13
交響曲	7
管弦楽	37
オルガン曲	11
ピアノ曲	3

以上は、3回以上演奏された楽曲のジャンル（様式）別の演奏頻度である。

まず歌劇（オペラ）作品が圧倒的に多いことがわかる。歌劇は、いわゆる総合芸術で歌と管弦楽と演技と舞台があり、物語に基づいて演奏される音楽である。この歌劇の中でも特に序曲（歌劇の最初や、幕の初め

に演奏される管弦楽曲)の演奏頻度が高い。次いで数をだいぶ減らして組曲が並ぶ。このふたつに共通していえることは、性格付けがはっきりしているということである。歌劇の序曲は、物語の要所要所で演奏される音楽のいわばハイライトで、その後に現れる様々な主題が挿入されていることが多く、管弦楽の演奏会でも序曲だけが演奏されることも多い。組曲は、性格の異なるいくつかの曲からなる。様々な形式の舞曲であったり、歌劇や劇音楽の抜粋で構成されることが多い。したがって、1曲1曲が醸し出すイメージが比較的わかりやすい音楽といえる。

3位にあがっている協奏曲(コンチェルト)で、演奏された楽曲は、ほぼすべてバロック時代に作曲された楽曲の編曲である(1曲のみ「ラヴァース・コンチェルト」があるが、これも原曲はバッハによる)。そしてそのうちの半数が、ヴィヴァルディが『和声と創意への試み』(作品8)として書いたヴァイオリン協奏曲の中の「四季」と呼ばれる協奏曲の編曲で、その中でも特に「春」が多い。

5) 考察：コンクールにおける楽曲選択に見るリード合奏の傾向性

ここまで、熊本県小学校器楽合奏コンクールで演奏された楽曲を様々な角度から分類することで、いくつかの傾向性を明らかにすることができた。

まず80年代に出場校が増加の一途をたどったことは、コンクールへの出場の手組みを広げたC部門が新たに設置されたことが起因のひとつであることは間違いない。しかしながらA部門の増加はそれだけでは説明できず、さらに調査を進めなければならない。

演奏曲目の傾向については、まずジャンル別に見てみると、管弦楽による楽曲(表5参照)が圧倒的に多く、ピアノやオルガンといった鍵盤楽器の楽曲の編曲わずかながら見られるが、声楽曲もリード合奏のためのオリジナル楽曲や、西洋音楽以外の選曲はほとんど見られない。これについては、例えば、1974年に発行された小池政雄編著『器楽合奏名曲集』(器楽合奏研究連盟サービスセンター)には、曲集の特徴として「管弦楽曲は直訳的編曲をさげ、(中略)、リード合奏独自の美しさを最高に発揮できる曲を選んで編曲」したとあり、全10巻の中に多くの管弦楽曲の編曲が含まれている。また全音楽譜出版社の『クラス編成によるリード合奏総譜集1』(1962)では、教師の「編曲力の必要性」を説いており、そこにも管弦楽曲の響きをいかに再現するかが詳説されている。また筆者らが万谷雄一氏に行ったインタビューの中で、リード合奏はオーケストラ作品を子どもが実際に演奏する体験であり、そのための編曲法の重要性を指摘していた。以

上のような理由からも管弦楽曲の編曲が多くなったと推察されるが、その中でも、とりわけ歌劇の序曲が群を抜いていることはすでに指摘した。以上のことから、コンクールにおいては、種々様々な楽器で構成され色彩豊かで、曲調はわかりやすく、物語性に富み、演奏効果の出しやすい楽曲が好まれていたと推察することができる。

そしてこの推察に基づくと、時代別の演奏頻度でロマン主義の音楽が多くみられることも納得できる。ロマン主義の音楽を一括りするの難しいが、性格的小品や交響詩が生まれ、歌劇は音楽、舞台共に巨大化し、また標題音楽や拡大された管弦楽など歌を含まない器楽音楽もより人間の感情に直接的な物語性が強調され、音楽の構造や管弦楽法は後期に向けてより複雑化された時代であった。

図1は、演奏された作曲家が主に活躍した時代区分と、各楽曲別の演奏頻度を表したものである。

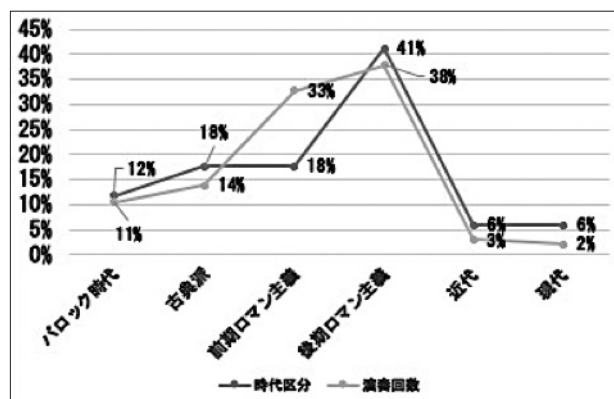


図1 作曲された時代区分と演奏楽曲 (%)

時代区分と演奏された楽曲の割合は概ね一致しているが、ロマン主義をおおよそ前期(表4のウェーバーからニコライまで)と後期(表4のフロトーからドヴォルザークまで)に分けたとき、前期ロマン主義に含まれる作曲家の割合が少なくもかわらず、演奏頻度の割合は高くなっていることがわかる。前期の中ではロッシニの演奏頻度が圧倒的に多いのだが、いずれにしても他の時代区分よりも管弦楽法が聴き映えし、また後期よりも曲の構成や楽器の扱い方がわかりやすいために小学生が演奏するには好まれた楽曲であったと推察される。

ところで、これらの演奏楽曲は、教科としての音楽とどのような関わりがあるのだろうか。表2の楽曲の内、1958年改定から1989年改定までの小学校学習指導要領に鑑賞共通教材として指定されたものは、スッペ作曲喜歌劇「軽騎兵」序曲(1968, 1977, 1989年改定の学習指導要領に掲載)のみである。ちなみにバッハ作曲「小フーガ」ト短調(1969, 1977,

1989年改定の学習指導要領に掲載)、ヴィヴァルディ作曲「四季」より「春」第1楽章(1969, 1977, 1989年改定の学習指導要領に掲載)、ボロディン作曲歌劇「イーゴリ公」より「ダッタン人の踊り」(1969, 1977, 1989年改定の学習指導要領に掲載)は中学校学習指導要領の鑑賞共通教材であった。つまり鑑賞共通教材との関わりはほとんど見られず、むしろ中学校の鑑賞教材をリード合奏用に編曲して演奏する頻度のほうが多いことがわかる。それでも全体からすればその割合は少なく、コンクールで演奏される楽曲のほとんどは、鑑賞共通教材とはほとんど関わりが見られないことが明らかとなった。

## 6. 今後の課題

今後の課題として、まず今回調査した年代の前後の調査を進めることでより包括的なレポートの推移を明らかにすることがあげられる。またA部門においてもどのような編成で実際演奏されていたかについては今回のプログラム調査からは明らかにできなかった。コンクール時の写真等から今後明らかにしていきたい。そこから現在のリード合奏形態に至るまでの変遷を見取ることができると考えている。またこれまでの調査から演奏される楽曲の多くは、教師自らが編曲していたことが判明しているが、一方で、1960年代から多くの器楽合奏集が出版されている。どのような形で演奏されていたのかは、当時の演奏録音や実際使用された総譜などから明らかにしていきたい。さらに全国の事例との比較検討を進めることで熊本における器楽合奏文化やそれを推進してきた音楽教師文化を明らかにすることができるだろう。以上、今後も継続して調査分析を進めることで、熊本県市における小学校器楽合奏の変遷とその教育的な意義を明らかにしていきたいと考える。

最後に、本調査を進めるにあたってインタビューを引き受けてくださった万谷雄一先生ならびに藤川誠先生に深く感謝申し上げます。藤川先生には、器楽合奏コンクール等の資料を提供いただいた。重ねてお礼申し上げます。

また本稿は、平成29年度部局長裁量経費「熊本における小学校リード合奏に関する調査研究」の助成を受けて実施された調査成果の一部である。

## 7. 引用・参考文献

- ・花村大・陶野重雄著『クラス編成によるリード合奏総譜集1』全音楽譜出版社, 1962年.
- ・小池政雄編著『器楽合奏名曲集第10集』器楽合奏研究連盟サービスセンター(1974).
- ・嶋田由美「戦後の器楽教育の変遷－昭和期の『笛』と『鍵盤ハーモニカ』の扱いを中心として－」, 『音楽教育実践ジャーナル』第7巻第2号, 15-25頁(2010).
- ・樫下達也「戦前から戦後にかけての音楽教育研究団体の系譜: 器楽教育成立史研究の視点から」, 『教育学科学論集』17, 1-9頁(2014).
- ・樫下達也「日本器楽教育連盟の設立(1956年)とその音楽教育史上の位置」, 『研究論叢』21, 29-42頁(2015).
- ・熊本県音楽教育研究会・RKK熊本放送主催第25回～第34回「熊本県小学校器楽合奏コンクール」プログラム(1981～1990年).



回数	日時	都庁名	学校名	演奏曲目	作曲	指揮		
第28回	昭和59年10月28日	鹿沼郡	西里	歌劇「ストラダラ」序曲	フロート	藤本清子		
		玉名市	栗山	歌劇「シオンダ」序曲	ロッシーニ	興栄		
		天草郡	橋本	歌劇「ジョンダ」より鳥の踊り	ボシキエリ	林田尚弘		
		菊池市	隈府	歌劇「ザンバ」序曲	エローール	田中和徳		
		八代郡	文政	歌劇「オペロン」序曲	ウェーバー	永椎直美		
		天草郡	二江	歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	船山美恵		
		下益城郡	杉山	歌劇「セミラミディ」序曲	ロッシーニ	南恵子		
		荒尾市	緑ヶ丘	ラヴアース・コンチエルト	パッサ	山中廣子		
		天草郡	大多尾	舞踊組曲「イイノス」から子守歌とバラの乙女達の踊り	ハチャトゥリアン	山中廣史		
		熊本市	御幸	スラブ舞曲 第1番	ドヴォルザーク	一井武幸		
		上益城郡	河船	「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」第一楽章	モーツァルト	岩井宏次郎		
		熊本市	桜木	小フーガト短調	パッサ	栗和子		
		熊本市	白坪	主よ、人の望みの喜びよ	パッサ	木下幸子		
		上益城郡	甲佐	祝典賛歌	松本恒敏	伊藤野留美		
		上益城郡	広安	「四季」より第一楽章	グイヴァルディ	上野典子		
		熊本市	本庄	子どものためのラプソディー	松本恒敏	岩山恵美子		
		玉名市	梁山	交響曲36番「リンツ」第1楽章	モーツァルト	興栄		
		熊本市	若葉	「カルメン」組曲よりアレリユードとアラゴネーズ	ビゼー	寺本祥子		
		熊本市	託麻東	「カルメン」組曲よりアレリユード	ビゼー	羽田野晴美		
		第29回	昭和60年10月27日	熊本市	鹿沼郡	組曲「風船会の縁」よりキエフの大門	ムソルグスキー	益崎英二
熊本市	向山			組曲「玉宮の花火の音楽」より平和と歓喜	ヘンデル	佐藤節子		
熊本市	熊本			合奏協奏曲「クリスマス協奏曲」より	コレリ	佐藤節子		
熊本市	熊本			歌劇「絹のきざし」序曲	ロッシーニ	若杉徹		
天草郡	河内			歌劇「マルタ」序曲	フロート	今福高子		
阿蘇郡	中原			歌劇「マルタ」序曲	フロート	原山昭幸		
鹿沼郡	花里			歌劇「マルタ」序曲	フロート	藤本清子		
熊本市	花園			歌劇「タンクレディ」序曲	ロッシーニ	藤川誠		
熊本市	日吉			歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	浜裕里		
上益城郡	益城中央			歌劇「ストラダラ」序曲	フロート	松原里美		
熊本市	黒髪			歌劇「ストラダラ」序曲	フロート	丸目雄二		
天草郡	黒岡			歌劇「ザンバ」序曲	エローール	濱崎よしえ		
本渡市	亀場			歌劇「サムソンとデリラ」よりバツカナル	サン＝サーンス	有江浩子		
熊本市	春日			歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	田原公一		
天草郡	榎本			歌劇「アルジェのイタリヤ女」序曲	ロッシーニ	林田尚弘		
天草郡	千丁			歌劇「アルジェのイタリヤ女」序曲	ロッシーニ	森育代		
天草郡	志岐			歌劇「アエロド」序曲	グレルク	坂本豊洋		
菊池市	隈府			歌劇「アウリスのイフィゲニア」序曲	グレルク	林田しゅん子		
熊本市	城商			ベルシヤの市場にて	ケテルビー	田中和徳		
第30回	昭和61年10月12日			熊本市	春日	歌劇「セミラミディ」序曲	ロッシーニ	松永祐子
		熊本市	西里	歌劇「セミラミディ」序曲	ロッシーニ	田原公一		
		鹿沼郡	益城中央	「白鳥の湖」より白鳥の踊り・ハンガリー序曲	チャイコフスキー	松原里美		
		熊本市	城南	中国の僧院の庭にて	ケテルビー	松永祐子		
		熊本市	城北	小フーガト短調	パッサ	市原彰		
		熊本市	白坪	「四季」より第一楽章	グイヴァルディ	木下幸子		
		熊本市	御幸	交響詩「フィンランディア」	シベリウス	一井武幸		
		熊本市	桜木	交響曲「新世界」第4楽章	ドヴォルザーク	栗和子		
		荒尾市	緑ヶ丘	交響曲「新世界」第4楽章	ドヴォルザーク	田中廣子		
		熊本市	附風	交響曲「新世界」第4楽章	ドヴォルザーク	岩山恵美子		
		熊本市	託麻東	喜劇「能辨兵」序曲	スッペ	羽田野晴美		
		第30回	昭和61年10月12日	天草郡	大多尾	「アルジェのイタリヤ女」序曲	ロッシーニ	今福高子
				熊本市	鹿沼郡	合奏協奏曲3番よりアリア・ガボット	パッサ	山中廣史
				熊本市	杉山	歌劇「蓋むかきざき」序曲	ヴィヴァルディ	横手とし子
				熊本市	本庄	歌劇「マルタ」序曲	フロート	丸目雄二
				八代郡	宮原	歌劇「マルタ」序曲	フロート	岩田由美子
				菊池市	隈府	歌劇「マルタ」序曲	フロート	田中和徳
				熊本市	黒髪	歌劇「バグダットの太守」序曲	ボワエルデュー	大仁田洋子
				天草郡	河内	歌劇「タンクレディ」序曲	ロッシーニ	今福高子
				天草郡	黒岡	歌劇「タンクレディ」序曲	ロッシーニ	椎葉美保子
阿蘇郡	中原			歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	嶋村智加代		
熊本市	若葉			歌劇「ストラダラ」序曲	フロート	石田清美		
熊本市	花園			歌劇「ソブシヤ男爵」序曲	シェトラウス	瀧川誠		
天草郡	志岐			歌劇「オペロン」序曲	ウェーバー	坂本豊洋		
八代郡	文政			歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	永椎直美		
熊本市	鹿沼郡			歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	生田由美子		
天草郡	榎本			歌劇「イェゴリ公」序曲	ニコライ	藤本尚弘		
天草郡	二江			歌劇「ウインザーのイタリヤ女」序曲	ボロディン	武田和子		
本渡市	亀場			歌劇「アルジェのイタリヤ女」序曲	ロッシーニ	有江浩子		
八代郡	千丁			歌劇「アウリスのイフィゲニア」序曲	グレルク	森育代		
熊本市	日吉			「アルジェのイタリヤ女」序曲よりアラランドール	ビゼー	浜裕里		
熊本市	城南	マラゲーニヤ	レオノーナ	松永祐子				
熊本市	田辺	ハンガリー舞曲第7番と第1番	ブラームス	横手とし子				
熊本市	城北	トッカータとフーガト短調	パッサ	市原彰				
熊本市	向山	中国の僧院の庭にて	ケテルビー	佐藤節子				
熊本市	熊本	「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」第一楽章	モーツァルト	岩山恵美子				
阿蘇郡	波中郎	バレエ「まりも」より前奏曲・山刀の踊り	石井敏	田上利昭				
熊本市	本庄	小フーガト短調	パッサ	丸目雄二				
宇土市	宇土	「四季」より第一楽章	グイヴァルディ	上野伸子				
熊本市	白坪	四季より「秋」第1楽章	グイヴァルディ	木下幸子				
人吉市	人吉西	交響曲第39番より「メヌエット」	モーツァルト	唐津三敏				
球磨郡	久米	交響曲39番より「メヌエット」	モーツァルト	尾方千保				
熊本市	花園	カマリンスカヤ	グリーンカ	瀧川誠				
本渡市	亀場	歌劇「魔弾の射手」序曲	ウエーバー	野水由美				
下益城郡	杉山	歌劇「絹のきざし」序曲	ロッシーニ	南恵子				
菊池市	隈府	歌劇「絹のきざし」序曲	ロッシーニ	米木美智子				
人吉市	中原	歌劇「絹のきざし」序曲	ロッシーニ	平野貞子				
人吉市	黒岡	歌劇「絹のきざし」序曲	ロッシーニ	伊豆野浩				
八代郡	千丁	歌劇「マルタ」序曲	フロート	太刀川さよ子				
牛深市	牛深	歌劇「マルタ」序曲	フロート	西村俊美				
天草郡	高岡	歌劇「ナブッコ」序曲	ベルディ	濱崎よしえ				
八代郡	文政	歌劇「タンクレディ」序曲	ロッシーニ	永椎直美				
熊本市	黒髪	歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	大仁田洋子				
阿蘇郡	中原	歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	嶋村智加代				
熊本市	日吉	歌劇「ストラダラ」序曲	フロート	林本美				
八代郡	宮原	歌劇「ストラダラ」序曲	フロート	岩田由美子				
天草郡	大多尾	歌劇「ストラダラ」序曲	フロート	村尾礼子				
上益城郡	甲佐	歌劇「ストラダラ」序曲	フロート	川原徳子				
熊本市	鹿沼郡	「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	生田由美子				
鹿沼郡	西里	歌劇「アルジェのイタリヤ女」序曲	ロッシーニ	中村高子				
天草郡	河内	歌劇「アルジェのイタリヤ女」序曲	ロッシーニ	今福高子				



回数	日時	都庁名	学校名	演奏曲目	作曲	指揮
第33回	平成元年10月29日	上益城郡	益城中央	子どもの組曲	野口孝信	田原政子
		熊本市	熊大付属	交響曲第2番第3楽章	ブラームス	岩山恵美子
		熊本市	日吉	交響曲「新世界」第4楽章	ドヴォルザーク	松並弘子
		熊本市	御幸	バレエ組曲「コペリア」より	ドリーヴ	松下公博
		熊本市	独立	組曲「アルルの女」より	グリーグ	荒木由美
		玉名市	玉名町	組曲「アルルの女」より	ビゼー	鹿谷川和英
		熊本市	田辺	2つのバイオリンのための協奏曲第1楽章	パッサ	永谷清一
		下益城郡	河江	喜劇「こらもり」序曲	シュトラウス	南恵子
		上益城郡	甲佐	歌劇「天国と地獄」序曲	オッパエンバック	川原誠子
		熊本市	白坪	歌劇「マルタ」序曲	フロトー	藤川誠
		熊本市	西合志	歌劇「マルタ」序曲	フロトー	丸田順子
		熊本市	本庄	歌劇「フィガロの結婚」序曲	モーツァルト	奥田健二
		天草郡	志岐	歌劇「ナブッコ」序曲	ベルディ	中野章
		熊本市	西里	歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	上田久美子
		天草郡	船本	歌劇「カヴァレリア・ルースティカーナ」より第2楽章	マスカーニ	山崎良彦
天草郡	鷹岡	歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	嶋山浩子		
天草郡	二江	歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	武田和子		
熊本市	面岡	歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	田嶋公一		
熊本市	菱形	歌劇「ウイリアム・テル」序曲	ロッシーニ	三宮多雄子		
阿蘇郡	波野中部	歌劇「イーゴリ公」よりダツタン人の踊り	ポロツァイン	古藤英		
本渡市	亀場	アララ	スペイン民謡	野水由美		
熊本市	春日	ベルシヤの市場にて	ケテルビー	麻生いづみ		
熊本市	託所南	ベルシヤの市場にて	ケテルビー	永光美波		
熊本市	出水	バレエ組曲「ガイーンズ」より剣の舞	ハチャトゥリアン	時松聡子		
阿蘇郡	西里	「アイネ・クラウネ・ナハトムジーク」第1楽章	モーツァルト	河元弘美		
熊本市	熊大付属	スラブ行進曲	チャイコフスキー	丸田健二		
熊本市	黒髪	小フーガ短調	バッハ	大仁邦子		
熊本市	桜井	「四季」より第1楽章	ヴィヴァルディ	田代陽子		
上益城郡	中央	子どものためのラプソディー	松本恒敏	高橋美夫		
熊本市	城南	スペイン組曲より「ファンダリス」	レクオーナ	一井武章		
阿蘇郡	波野中部	組曲「くろみどり人形」よりマーチ、こんぱいという踊り、トレバック	チャイコフスキー	古藤英		
玉名市	玉名町	協奏曲「四季」より「春」第3楽章	ヴィヴァルディ	長谷川和英		
上益城郡	甲佐	歌劇「絹のさざはし」序曲	ロッシーニ	戸高初江		
熊本市	清水	歌劇「結婚手形」序曲	ロッシーニ	向田紀彦		
下益城郡	河江	歌劇「リスラソとリュミラ」序曲	グリーンカ	南恵子		
熊本市	御幸	歌劇「マルタ」序曲	フロトー	松下公博		
熊本市	菱形	歌劇「マルタ」序曲	フロトー	三宮多雄子		
熊本市	白坪	歌劇「フィガロの結婚」序曲	モーツァルト	藤川誠		
熊本市	船本	歌劇「フィガロの結婚」序曲	モーツァルト	上崎恵美		
熊本市	城北	歌劇「バグダットの太守」序曲	ボワエルデュエ	田中邦子		
天草郡	志岐	歌劇「タンクレディ」序曲	ロッシーニ	中野章		
熊本市	日吉	歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	吉岡美子		
阿蘇郡	中原	歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	後藤よしみ		
牛深市	牛深	歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	西村俊美		
天草郡	小宮地	歌劇「ストラダラ」序曲	フロトー	相良信代		
天草郡	八代部	歌劇「ストラダラ」序曲	フロトー	横江淳子		
人吉市	人吉東	歌劇「ジョコンダ」より時の罫り	ボネキエリ	永植直美		
熊本市	面岡	歌劇「ジプシー男爵」序曲	シュトラウス	安達陽美子		
熊本市	富岡	歌劇「アルジェのイタリヤ女」序曲	ロッシーニ	田嶋公一		
熊本市	田辺	アメリカン・パトロール	アメリカ民謡	永谷清一		

回数	日時	都庁名	学校名	演奏曲目	作曲	指揮
第31回	昭和62年10月25日	熊本市	御幸	グルック	グルック	一井武章
		天草郡	船本	グルック	グルック	藤本尚弘
		天草郡	二江	「アルルの女」第2組曲よりファンランドール	ビゼー	武田和子
		天草郡	志岐	美しきガラテア	スッペ	坂本孝洋
		熊本市	面岡	歌劇「セミラーミデ」序曲	ロッシーニ	田嶋公一
		熊本市	城北	リード合奏のためのプレリュード	高橋雄雄	青木暎子
		熊本市	黒髪	バスカリアとアール・ド・フランス	パッサ	大仁邦子
		人吉市	人吉東	組曲「水の上の音楽」よりアラ・ホーノン・バグ	ヘンデル	安達陽美子
		熊本市	菱形	「カルメン」組曲よりプレリュードとゴゴネーズ	ビゼー	三宮多雄子
		上益城郡	益城中央	「カルメン」組曲よりプレリュード	ビゼー	松崎潤美
		天草郡	富岡	組曲「白鳥の湖」よりワルツ	チャイコフスキー	渡崎よしえ
		玉名市	玉名町	組曲「白鳥の湖」からスワツォとギヤロップ	カバレフスキー	長谷川和英
		牛深市	牛深	組曲「マ・メー・ロウ」より罫りの森の美女のバヴァーズ	ラヴェル	西村俊美
		熊本市	白坪	協奏曲「四季」より「春」第3楽章	ヴィヴァルディ	江原浩子
		熊本市	熊大付属	喜劇「こらもり」序曲	シュトラウス	岩山恵美子
熊本市	田辺	管弦楽組曲「こらもり」序曲	パッサ	水谷清一		
天草郡	二江	歌劇「恋のまじさき」序曲	ロッシーニ	武田和子		
熊本市	花園	歌劇「精霊の王者」序曲	ウェーバー	藤川誠		
埴原郡	久米	歌劇「絹のさざはし」序曲	ロッシーニ	田上利昭		
天草郡	日吉	歌劇「マルタ」序曲	フロトー	林本美		
天草郡	船本	歌劇「マルタ」序曲	フロトー	山崎良彦		
八代部	千丁	歌劇「バグダットの太守」序曲	ボワエルデュエ	橋本英生		
天草郡	河内	歌劇「ナブッコ」序曲	ケテルビー	今福高子		
熊本市	本庄	歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	丸田健二		
阿蘇郡	中原	歌劇「セビリアの理髪師」序曲	ロッシーニ	永井和彦		
上益城郡	甲佐	歌劇「ジョコンダ」より時の罫り	ボネキエリ	川原誠子		
下益城郡	河江	歌劇「ジプシー男爵」序曲	シュトラウス	南恵子		
八代部	文政	歌劇「オペロン」序曲	ウェーバー	永植直美		
熊本市	西里	歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	中野美子		
天草郡	亀場	歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲	ニコライ	野水由美		
熊本市	御幸	歌劇「イーゴリ公」よりダツタン人の踊り	ポロツァイン	松上公博		
阿蘇郡	波野中部	歌劇「アルジェのイタリヤ女」序曲	ロッシーニ	田上利昭		
天草郡	志岐	歌劇「アルジェのイタリヤ女」序曲	グルック	森薫子		
下益城郡	杉山	「アルルの女」第2組曲よりファンランドール	グルック	熊谷信代		
熊本市	清水	フック・オン・クラシック	ビゼー	村上茂		
熊本市	城南	ベルシヤの市場にて	ケテルビー	坂田麻里		
熊本市	託所南	ベルシヤの市場にて	ケテルビー	緒方舞子		
阿蘇郡	中原	歌劇「セミラーミデ」序曲	ロッシーニ	徳永千鶴		
熊本市	甲佐	歌劇「セミラーミデ」序曲	ロッシーニ	永植直彦		
熊本市	清水	ゆかいな羊飼	フロトー	永藤正浩		
熊本市	春日	ハリー・ヤーノシュ	コダーイ	福田里		
熊本市	弓削	ドイツ舞曲	モーツァルト	原生いづみ		
熊本市	城南	中国の音楽の庭にて	ケテルビー	藤田まりこ		
熊本市	黒髪	ハンガリー短調第2番	リスト	大仁邦子		
熊本市	城北	バレエ「まじさき」より前奏曲・山刀の罫り	石井敬	三原美子		
人吉市	人吉東	エグモント序曲	ベートーベン	安達陽美子		
熊本市	花園	歌劇「ストラダラ」序曲	フロトー	甲斐隆子		
天草郡	牛深	歌劇「ストラダラ」序曲	フロトー	西村俊美		
玉名市	備	小フーガ短調	バッハ	浦田由美		

第34回 平成2年10月21日

第33回 平成元年10月29日